

令和 8 年度 京都市 英語教育改善プラン

「国際都市・京都から世界へ」実践的英語力の育成

目標

☒ 言語活動
 ☐ 指導と評価の一体化
 ☒ 教師の英語力・指導力
 ☒ 校種間連携
 ☒ ALTの参画
 ☐ ICTの活用
 ☐ AIの活用
 ☐ その他

(パフォーマンステスト含む)

(専科教員含む)

(AIを除く)

1. 目標に対する現状

改善が進んだ点

- ①言語活動を通じた指導について、目的や場面、状況の設定について、カリキュラム・マネジメントの視点など工夫が見られる。
- ②小中高連携について、小中高外国語指導講座Ⅰ・Ⅱを実施し、校種間連携を進めることができた。

未だ改善が必要な点

- ①ALTの活用やICTの活用に依然として学校間の差が見られる。
- ②言語活動について、英語に触れ、英語を使用する機会に課題が見られる。

2. 要因分析

- ①研修においてワークショップを実施し、京都市スタンダードでも例示を増やしたことで、自校に合わせて工夫・改善したと考えられる。
- ②小中高外国語指導講座Ⅰにおいてワークショップを、Ⅱにおいて実践発表を実施したことで、関心が増し、校種をつなぐ意識が改善したと考えられる。

- ①配置日のALT活用時数に学校間格差が見られる。また、授業外での活用を実施している学校が増えてはきているものの、十分な活用ができていないと言えない。
- ②授業内での言語活動については、ALTの活用や授業改善などが十分できていないことが要因と考えられる。

3. 目標を達成するための施策・事業

- ①英語専科教員等研修会・小中高外国語指導講座の推進
目的や場面、状況の設定がなぜ大事なのかを研修会で協議し、京都市スタンダードにて、複数の例示を行う。
(参考URL：<https://skc-cms.edu.city.kyoto.jp/sogokyoiku/>)
- ②小中高外国語指導講座Ⅰ・Ⅱをシリーズ化し、校種間連携を講義ではなくワークショップ形式で実施することで、12年間の学びと育ちを指導者が協議し意識を高める機会を創出する。
(責任転嫁ではなく協力の重要性を認識)
- ①ALT活用の推進
授業内活用を促進するため、1日5時間活用を推進する。また、授業外での活用事例を発信し、様々な場面でALTを身近な存在と感じ、“物怖じしないスピリッツ”を育む。
- ②言語活動の推進
英語への苦手意識や、言語活動を通じた指導について理解を深められていない指導者の授業改善が必要である。授業内の言語活動を充実させるため、年間研修にて授業改善の具体を協議題に含め、実践に生かす。苦手意識克服のために、ALTとの対話研修を夏期休業期間中に実施する。

令和 8 年度 京都市 英語教育改善プラン

「国際都市・京都から世界へ」実践的英語力の育成

○CEFR A1レベル相当以上の英語力を取得又は有すると思われる生徒の割合（R7：59.0％⇒R8：60％以上）

目標

☒ 言語活動
 ☐ 指導と評価の一体化
 ☒ 教師の英語力・指導力
 ☒ 校種間連携
 ☒ ALTの参画
 ☐ ICTの活用 (AIを除く)
 ☐ AIの活用
 ☐ その他

1. 目標に対する現状

改善が進んだ点

- ①「話すこと [やりとり]」について、引き続き物怖じせずにコミュニケーションを図ろうとする姿が見られる。
- ②小中高連携について、小中高外国語指導講座Ⅰ・Ⅱを実施し、校種間連携を進めることができた。

未だ改善が必要な点

- ①「聞くこと」においてまとまりのある内容を聞いて概要や要点を理解すること、また聞いたことや読んだことをもとに考えなどを表出することに課題が見られる。
- ②授業を英語で進め、生徒が授業の半分以上、言語活動に取り組むことに課題がある。

2. 要因分析

- ①パフォーマンステストの実施回数が増えてきたことや、昨年度も全校においてEnglish Cafeを実施したこと、さらに夏と秋に英語を使う実践の場（課題解決型フィールドワークやイングリッシュキャンプ）を提供したことなどで英語を学ぶモチベーションが上がった。
- ②小中高外国語指導講座Ⅰにおいてワークショップを、Ⅱにおいて実践発表を実施したことで関心が増し校種を繋ぐ意識が改善したと考えられる。
- ①教科書が改訂され質、量ともに向上したため、リスニングに割く時間が以前に増して取りづらくなったことが要因とみられる。
- ②低位の生徒が英語で進められることに不安があるとし、教師自身の英語使用や、英語力の向上に目を向けない。

3. 目標を達成するための施策・事業

- ①授業改善の推進…CITY ALTを増員し、研修を通してリーダーとしての役割を果たしてもらい、さらに言語活動を通じた指導、中間指導等に重点をおき授業改善を展開する。
- ②小中高外国語指導講座Ⅰ・Ⅱをシリーズ化し、校種間連携を講義ではなくワークショップ形式で実施することで、12年間の学びと育ちを指導者が協議し意識を高める機会を創出する。（責任転嫁ではなく協力の重要性を認識）
- ③TOEFL Primaryの導入をさらに進めていくことで授業改善が進んでいるかどうかの指標とする。⇒A 1 相当生徒の率の増加。
- ④毎朝、学校として「聞くこと」の力の強化を推し進め、確実にインプットからインテイクへの過程を踏ませることで、「話すこと[やりとり]・[発表]」の力へつなげていく。（MES＝モーニングイングリッシュシャワー）
- ①「聞くこと」の力の強化の推進
授業における帯活動で「聞くこと」に力を入れたり、学校全体で毎朝、1 時間目が始まる前にリスニングと音読に取り組む、モーニングイングリッシュシャワー（MES）を広めていったりし、日常的に「聞くこと」の力の強化に取り組む。
- ②若年層に対して資格試験の受験を推奨、費用を補助し、さらに英語学習アプリを導入し、採用から5年以内にB 2 以上を目指す研修システムを構築する。

令和 8 年度 京都市 英語教育改善プラン

「国際都市・京都から世界へ」実践的英語力の育成

○CEFR A2/B1レベル相当以上の英語力を取得又は有すると思われる生徒の割合
(R7 : A2以上 81.7%、B1以上 30.5% ⇒R8 : A2以上 100%、B1以上 30.0%以上)

目標

☒言語活動 ☐指導と評価の一体化 ☒教師の英語力・指導力 ☒校種間連携 ☒ALTの参画 ☐ICTの活用 ☐AIの活用 ☐その他
(パフォーマンステスト含む) (AIを除く)

1. 目標に対する現状

改善が進んだ点

未だ改善が必要な点

- ①生徒の発信力を高めるパフォーマンステストの検討・実施。高2生全体の発信力は高いレベルを維持している。
(Listening A2以上 : R6 70.7% R7 68.7%
Reading A2以上 : R6 79.5% R7 78.7%
Speaking A2以上 : R6 94.0% R7 91.5%
Writing A2以上 : R6 73.0% R7 78.4%
(GTEC 高2生全体))
- ②高校3年生 B1レベルの増加
R6 26.8% R7 30.5%

- ①パフォーマンステスト「話すこと」「書くこと」の効果的な実施と言語活動をさらに充実させるための授業における教員の英語使用促進。
(R6 70.2% R7 72.0% ← 目標値 100%)
- ②「やり取り」を通して即興性を育成し、学びを広げ・深める言語活動の充実
- ③ALTの授業内外における参画
- ④小中高連携の更なる推進

2. 要因分析

- ①評価検討委員会・研究会で各校の取組や英語教育実施状況調査結果の共有を図り、各校の取組の充実や授業改善につながったと考える。
- ①②生徒の発信力はGTEC（高2生）の結果から高い割合を維持しているが、引き続き実践的な英語力育成のための授業改善を行う。「やり取り」を通して即興性や発信力を育成することは授業内だけではなく、パフォーマンステストにおいてもさらに促進していく。授業外における発話機会も、生成AI学習アプリ等を活用し、増やしていく必要がある。
- ③授業内外における、ALTと生徒とのやり取りの場をさらに増やしていく。授業については、授業時間数だけでなく、どの場面で、どのように生徒と関わるかなどを検討し続ける必要がある。
- ④小中学校の取組を知る、また高校教員が小中の教員と直接情報共有する機会として、小中高合同教科指導講座を呼びかけているが、高校教員の繁忙期と重なり参加者数が限られる。

3. 目標を達成するための施策・事業

- ①①令和8年度も評価検討委員会を実施する。今年度も委員会内での共有を進めるとともに、教師の発話による生徒の英語力の向上につながる事例を含め、全市立高校にも随時情報を共有する。また市高英語研究会においても、授業改善・指導力向上に向けて情報共有を行い、情報発信を行なっていく。
また、「実践的英語力測定調査事業」として各校で高校2年生を対象にGTEC（4技能）を実施し、その結果をもとにして分析会を実施する。分析会において、各校の授業実践を客観的に振り返り、指導改善につなげる。
- ①言語活動が中心となった授業をより一層充実していくため、実践的な指導法を学ぶ研修の実施や、スキルアップ研修参加者による実践報告等の情報共有を図る。
- ②生成AIアプリを試行導入し、生徒の授業内外における発話機会の拡充と自己調整力の育成を図る。また導入校におけるアプリの活用と生徒の英語力・英語学習への変容について検証する。
- ③各校の授業見学や、ALTとのコミュニケーションを丁寧に図り、状況把握を通して改善へとつなげる。
- ④小学校英語指導講座、外国語小中高合同講座、中学校英語科教員指導力向上講座、高等学校英語教科指導講座等の、小中高合同実施の教科指導講座を実施し、更なる連携を進める。（いずれも全校種で参加可能）なお、参加が困難な場合には、講座動画の共有等により、学びの機会を確保する。
(参考URL : <https://skc-cms.edu.city.kyoto.jp/sogokyoiku/>)
- ④中高の英語教育の接続を強化するため、中高連携推進校を指定し、両校が協働して授業の改善・充実を図る取組を推進する。

京都市教育委員会

		2023		2024		2025		2026		2027	
校種	指標内容	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値
高等学校	①CEFR A2レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合(%)	85	80.5	85	85.5	86	81.7	100		100	
	①CEFR B1レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合(%)	20	27.2	30以上	26.8	30以上	30.5	30以上		30以上	
	②授業における、生徒の英語による言語活動の割合(%)	94	78.4	80	78.7	81		82		83	
	③スピーキングテストとライティングテストの両方を実施した学校の割合(%)	100	56.9	75	55.3	76		77		78	
	④「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の整備状況	設定(%)	100	100		100		100		100	
		公表(%)	100	91.7		100		100		100	
		達成状況の把握(%)	100	100		100		100		100	
	⑤CEFR B2レベル相当以上の英語力を有する英語担当教員の割合(%)	94	93.6	94	92.6	95	94.8	96		97	
	⑥英語担当教員が授業における発話の半分以上を英語で行っている割合(%)	100	54.9	100	70.2	100	72	100		100	

		2023		2024		2025		2026		2027	
校種	指標内容	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値
中学校	①CEFR A1レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合(%)	60以上	55.3	60以上	55.6	60以上	59.0	60以上		60以上	
	②授業における、生徒の英語による言語活動の割合(%)	100	70.2	75		76		77		78	
	③スピーキングテストとライティングテストの両方を実施した学校の割合(%)	100	83.7	85		86		87		88	
	④「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の整備状況	設定(%)	100	100		100		100		100	
		公表(%)	100	94.4		100		100		100	
		達成状況の把握(%)	100	90.3		100		100		100	
	⑤CEFR B2レベル相当以上の英語力を有する英語担当教員の割合(%)	55	54.1	55	55.1	56	66.8	57		58	
	⑥英語担当教員が授業における発話の半分以上を英語で行っている割合(%)	100	63.7	100		100		100		100	

		2023		2024		2025		2026		2027	
校種	指標内容	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値
小学校	「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の整備状況	設定(%)	100	100		100		100		100	
		公表(%)	60	57		100		100		100	
		達成状況の把握(%)	100	84.8		100		100		100	